［ボイス・オブ・ライフ］

VOICE OF LIFE

Take Free

12

2026.AUTUMN

世界に目を向け、未来を見つめる。

「過去」にできない戦時性暴力

日本軍による「加害の歴史」に向き合う

取材／安田菜津紀・佐藤慧

COVER PHOTO

フィリピン、ブラカン州サンミゲルに残る朽ち果てた洋館は、占領期に日本軍に接収され司令部が置かれていた。憲兵隊による地元住民の尋問・拷問も行われていたという。

Dialogue for People

VOICE OF LIFE

「過去」にできない戦時性暴力

日本軍「加害の歴史」に向き合う

取材

安田 菜津紀 Natsuki Yasuda

中東、東南アジア、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地の記録を続ける。TV、ラジオ番組などにもレギュラー出演中。

佐藤 慧 Kei Sato

アフリカや中東、東ティモール、自然災害の被災地などを取材。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的な成長であると信じ、紛争、貧困の問題、人間の思想とその可能性を追う。

1941年12月8日、真珠湾攻撃からわずか数時間後、日本軍は当時アメリカの統治下にあったフィリピンへの爆撃を開始し、侵攻の火蓋を切った。翌1942年1月には、無防備都市宣言がなされていた首都マニラを占領して軍政を敷き、同年4月にバタアン半島、5月にコレヒドール島に立てこもっていたアメリカ・フィリピン両軍を降伏させた。この降伏兵の移送時に発生したのが、過酷な状況下で多くの捕虜が命を落とした「バタアン死の行進」だ。

日本軍による無数の加害

日本の占領政策は「大東亜共栄圏」の建設と「アジアの解放」を謳っていたが、その実態は資源・食糧の強制的な収奪と、住民への厳しい抑圧だった。1943年には、日本の傀儡政権である「フィリピン第二共和国」を樹立させるが、民衆の不満と怒りは高まり、「フクバラハップ（抗日人民軍）」などのゲリラ組織による、激しい抗日・解放運動がフィリピン各地で展開された。

日本軍はこれらを弾圧するため、ゲリラと〝疑わしき〟一般市民をも容赦なく拷問・虐殺し、村ごと焼き払う「ゲリラ掃討作戦」を繰り返した。《フィリピン人を殺害する際は、一ヵ所に集めて処理し、弾薬や人員を浪費しないように配慮すること》などという命令が発せられていたことが、戦後の軍事裁判記録によりわかっている。約10万人の市民が犠牲となった「マニラ市街戦」や、バタンガス州リパ市で起きた住民の虐殺は、その一端に過ぎない。

1945年9月の「終戦」（※）に至るまでの約3年半にわたる占領と戦闘により、フィリピンでは100万人以上という甚大な数の命が奪われたといわれる。記録すら残っていない加害も無数にあるだろう。そうした暴力のひとつに、日本軍による組織的な性暴力があった。



※1945年9月の「終戦」
国際法上、第二次世界大戦が正式に終結したのは、東京湾の米戦艦ミズーリ号上で日本政府および大本営の代表が公式な降伏文書に調印した1945年9月2日とされている。しかし戦争トラウマが世代にわたり影響を与えることや、加害の歴史への反省がないまま構造的暴力や差別が現代の日本社会でも続いている現状を考えると、いまだ「終戦」とは言えない。

証言を次世代へ

ルソン島中部のパンパンガ州カンダバ市マバニケは、かつて日本軍による深刻な加害が行われた地だ。1944年10月の米軍レイテ島上陸以降、日本軍によるゲリラ討伐は激化した。同年11月23日、第14方面軍直轄の歩兵第9連隊などに下された組織的な作戦命令『撃作命甲第四六号』に基づき、日本軍は抗日ゲリラの拠点と見なしたマバニケを襲撃した。

村人たちは強制的に男女に引き離され、小学校に集められた男性たちは凄惨な拷問の末に銃殺されるか、教室ごと焼き殺された。女性や子どもたちは、略奪物資を地主の別荘「赤い家（バハイ・ナ・プラ）」まで運ばされた後、そのまま監禁され、建物内外のあらゆる場所で度重なる性暴力を受けた。

「私たちは動物のように監視されていました。田んぼの道は細く、誰かが転ぶと、日本兵に蹴り上げられました」

そう語るのは、当時8歳だったマリア・クイランタングさんだ。自身は荷物を運ばされてから解放されたものの、村の女性たちが性暴力を受けていたことを後になって知った。

「ここで起きたような悲劇が二度と繰り返されないように、私たちの証言は、次の世代へと受け継がれるべきものだと思っています」

今もナイフをかたわらに

マバニケにとどまらず、各地で同様の蛮行が戦争犯罪として記録されている。ルシア・D・ミサさんは、1929年、ブラカン州ノルザガライで生まれた。1944年10月、武装した5人の日本兵が無言で家に押し入った。抵抗した姉は外へ連れ出され惨殺された。家族を守ろうと山刀を手に応戦した父も銃剣で刺殺され、父に駆け寄った母は腹部を切り裂かれ息絶えた。その後ルシアさんは、高床式住居の床下に監禁され、他の女性たちとともに性暴力を受けた。

ルシアさんら被害女性たちは1993年、日本政府に公式な謝罪と損害賠償を求めて東京地裁へ提訴した。しかし裁判所は、戦前の公権力行使に対する「国家無答責の法理」や「平和条約等による請求権の消滅」を理由に請求を退け、2003年12月に最高裁でルシアさんたちの敗訴が確定した。

2026年4月、ルシアさんが夫と暮らす小さな部屋を訪れた。高齢になりベッドで過ごす時間が増えたが、近所の友人との

NEXT PAGE

[左]マニラ首都圏にある「パクララン教会」にはフィリピンの歴史を描いたモザイク画があり、日本軍の加害についても克明に描かれている。[中]目の前で家族を殺され、自身も性加害を受けた経験を伝えるルシア・D・ミサさん。[右]バタンガス州リパ市の博物館に展示されている日本軍による住民の虐殺の記録。







COLUMN

親子関係から考える、「誰もが生まれてきてよかったと思える社会」

by 伏見和子（D4P スタッフ／本動画シリーズ企画担当）



親子をときほぐす の動画はこちら

昨年の『感情と対話の哲学』に続き、小手川正二郎さん（國學院大学文学部教授）に出演いただいた動画シリーズ『親子をときほぐす』（全5回）を公開しました。テーマは「子どもを生むのは自分勝手?」「『社会の負担となる人』は／を生むべきではない?」など。「子どもをもつ人」と「もたない人」の間にある分断や、子どもをもつ選択肢を特定の人たちから奪うような価値観が生じる理由など、親子について哲学の観点から考える内容です。

制作にあたり意識したのは、私たちがいつの間にか前提としている「親子」観には、暴力や分断を容認してしまう側面があるのではないか――という問いです。「親子」について私たち一人ひとりが具体的に知っているのは、大抵の場合、自分の親や子との関係だけです。そのため親子にまつわる問題には孤独に対応せざるを得ず、周囲も介入しづらい。私自身も日々悩みながら過ごしています。しかし社会では、あたかも「親子」とはこういうものだという共通理解があるかのように、子を生み育てることが促されたり、政治の場で語られたりもしています。

実際に動画を視聴してくださった方からのご感想からは、親が「子どものためを思って」したことが、子どもにその後もずっと続く傷を残しかねないことや、その背景には、子育ての責任をすべて親に押しつける社会があることが伝わってきました。一方で、子どもがいない自分も子育てに参与していると気づかされた、といった心強いご感想も寄せられました。シリーズ最終回で語られる「誰もが生まれてきてよかったと思える社会」のために、一人ひとりに何ができるのか。動画を通して小手川さんと共に考えていただき、「親子をときほぐす」機会になれば嬉しいです。

おしゃべりが楽しみのひとつだと朗らかに笑った。しかしベッドの下の暗がりに目を凝らすと、数本の「ナイフ」が置かれている。長年こうして「武器」をかたわらに眠りについているという。「何かあったとき」のために――。

「加害の歴史」に向き合う必要性

1995年に発足した「アジア女性基金」による民間募金を原資とした「償い金」は、国による法的な責任を認めた「国家賠償」の枠組みを欠いているという根本的な課題を抱えていた。今も求められているのは、金銭のみならず公式かつ誠実な謝罪と法的責任の履行である。国連の女性差別撤廃委員会（CEDAW）は、2024年の総括所見で「戦争犯罪および人道に対する罪に時効はない」とし、被害者の包括的な権利回復を日本政府に対し勧告している。

惨劇はある日突然起こるわけではない。日常に放置されている構造的暴力を解体していかない限り、同じ過ちは繰り返されてしまう。「加害の歴史」に真摯に向き合い、応答し続けることが求められている。 安田・佐藤



日本軍の加害の歴史が刻まれている「赤い家（バハイ・ナ・プラ）」は、色あせて朽ちかけていた。

D4P職員のつぶやき



今野 大介 ／ D4P広報部

旅先で自転車に乗るのが好きです。車よりも、景色をゆっくり眺められ、道沿いの小さな発見を楽しめます。気になった場所ですぐ立ち止まり、人に道を尋ねるのも気軽です。少しだけ速度を緩め、距離を近づけると、ガラス窓越しに通り過ぎるだけでは見えてこない、人々の暮らしや土地の空気があります。そんな自転車で旅をする人が増えたら、世の中の誤解やいざこざも減って、今より少し平和になるのかもしれません。さて、明日はどこへ出かけよう。

Dialogue for People

認定NPO法人Dialogue for People （ダイアローグ フォー ピープル／D4P）

国内外の様々な地域で社会課題の渦中にある人々を取材し、写真や文章、映像などさまざまな表現を通じて、「伝える」ことを主軸に活動するメディアNPOです。どこか遠くの問題に思えてしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

d4p 検索
https://d4p.world

D4PのSNS一覧はこちらから

各地での取材をYouTubeで配信！



毎週水曜に安田菜津紀と佐藤慧が、気になるニュースや出来事をラジオ形式で配信中。ゲストを迎える回ではインタビューを交えながら、様々なテーマを深掘りしていきます。

D4P YouTube Channel YouTubeで検索！
d4p 検索

取材・写真・編集・発刊：Dialogue for People ／ 企画・構成・デザイン：sai company